

第 2 章

山形大学教員研修会 「第7回 教養教育FD合宿セミナー」

平成19年度教養教育改善充実特別事業
第7回山形大学教養教育FD合宿セミナー
「相互研鑽による教養教育の飛躍をめざして」



蔵王山寮管理人 長岡 仁 氏 撮影

日 時： 平成19年8月6日(月)～8日(水)
場 所： 山形大学蔵王山寮(電話023-694-9669)
主 催： 山形大学教育方法等改善委員会
山形大学高等教育研究企画センター

第 7 回 教養教育 FD 合宿セミナーパンフレットの抜粋

FD 合宿セミナーに当たって

山形大学は 6 学部を擁する総合大学です。教養教育は、総合大学の特性を有効に活用するために全学出動体制を採っており、それは山形大学の大きな個性にもなっています。学部の垣根を越え、山形大学全体の教育を考える上で、教養教育は全ての教員の共通基盤となるものです。また、生き残りをかけた大学改革に際し、授業の充実が最も重要な課題の一つでしょう。

今回のセミナーの第一の目的は、「個々の教員が、山形大学を支えることの意義と位置付け、教育の基本的構成要素、各授業科目の存在意義、授業設計、成績評価法などについて、あらためて主体的に検討し、再構築していただくこと」です。この目的を達成するために、まず、参加者の皆様に御担当いただく新しい授業科目について考えていただきます。そして、そのシラバスをグループで協力して作成していただきます。こうした一連の作業が有効な方法であることは、既に広く知られています。

セミナーは、本学への参画意識を高めるための 2 つのプログラムと、シラバスを作成するための 3 つのプログラムから構成されています。各プログラムは、グループ作業を中心に組まれており、参加者は学生が運営する学生主体型授業を体験することになります。

また、「教養教育を素材として、学部間の人的交流の拡大・充実を図ること」が第二の目的です。他部局の参加者と活発な議論を交わしながらプログラムを遂行し、セミナーが終了した後は、参加者が山形大学の教養教育を始めとした教育全般の発展に、より一層積極的に貢献されることを期待しています。

このセミナーは、「山形大学の構成員こそが山形大学の財産」という精神でのぞんでいます。

更に、このセミナーは山形県の大学・短大の FD ネットワークである“樹氷”を始めとして、全国の大学に開かれています。本セミナーが、相互研鑽の精神に則り、参加された大学・短大の発展に寄与されることを願っております。



第7回 山形大学教養教育FD合宿セミナー日程表

期 間 第1チーム：8月6日（月）～7日（火）

第2チーム：8月7日（火）～8日（水）

○第1日目

時 刻	項 目	担 当
12:50	山形大学集合・受付（正門付近）	事 務
13:00	送迎バス 大学出発	
14:00	会場到着 セミナー開会 開会のあいさつ	司会：DR-A
14:30	アイスブレイキング	DR-B
14:50	オリエンテーション	DR-A
15:00～16:30	プログラムⅠ「大学へのニーズと課題」	DR-A
16:30～16:40	休憩（10分間）	
16:40～18:10	プログラムⅡ「どのような大学にするか」	DR-A
18:10	休憩・夕食など	
19:30～21:00	プログラムⅢ「科目設計1：授業名と目標の設定」	DR-B
21:00～21:10	休憩（10分間）	
21:10～22:30	懇親会	DR-B
22:30	中締め	
23:00	就寝	

○第2日目

時 刻	項 目	担 当
7:30～	朝食・部屋退出	
8:30～10:00	プログラムⅣ「科目設計2：授業内容の作成」	DR-B
10:00～10:10	休憩（10分間）	
10:10～11:40	プログラムⅤ「科目設計3：シラバスの完成」	DR-B
11:40～	修了式	DR-A
12:20～	昼食	
14:30※	送迎バス 蔵王山寮出発	
16:00頃※	大学到着 解散	

※第2チームは13:30 送迎バス 蔵王山寮出発、15:00頃 大学到着 解散となります。

【留意事項】

- セミナー期間中の途中からの参加及び離脱は禁止とします。
- セミナー期間中の個人の呼称は、「〇〇さん」とします。
- 食事はセルフサービスとなります。食事時間になりましたら、共同で配膳作業等を行ってください。
- 1日目の入浴時間は設けておりませんので、18:10～19:30の時間帯で御利用ください。
- 起床と同時に、寝具を使用前と同様に整理・整頓し、使用した宿泊室・廊下等を清掃してください。
- 退出の際は、使用したシーツ・枕カバーをたたんで、指定する場所に返却してください。

第7回 山形大学教養教育FD合宿セミナー 班名簿

第1チーム：8月6日（月）～7日（火）

DR-A	小田 隆 治
DR-B	浅野 明

プログラムⅠ・Ⅱ

A班：べにばな班		B班：板そば班		C班：ぎふのうかい班		D班：ヤマユリ班		E班：花笠班	
人文	金澤 真理	地教	八木 浩司	地教	宮島 新一	地教	佐々木 正彦	人文	永野 由紀子
地教	奥間 智弘	工	栗山 雅文	工	奥山 澄雄	地教	大友 幸子	地教	ジェリーミラー
工	伊藤 和明	工	瀧浦 晃基	工	小山 明夫	工	井上 健司	工	佐藤 学
工	幕田 寿典	東文	森田 慎二郎	福島	板橋 孝幸	東文	矢口 和宏	高七	杉原 真晃
徳島	宮田 政徳	秋専	水野 麗	岐医	小林 貴子	弓専	山尾 徳雄	京教	巻本 彰一
九共	中谷 彰	産技	間宮 明	一専	平林 一隆	産技	吉田 明弘	法政	福沢 レベッカ
国短	熊倉 庸介								

プログラムⅢ・Ⅳ・Ⅴ

A班：たなばた班		B班：ブラボー班		C班：チームミラー班		D班：水シャワー班		E班：ラ・フランス班	
人文	金澤 真理	地教	八木 浩司	人文	永野 由紀子	地教	大友 幸子	地教	佐々木 正彦
地教	奥間 智弘	工	伊藤 和明	地教	宮島 新一	工	奥山 澄雄	工	井上 健司
工	瀧浦 晃基	工	幕田 寿典	地教	ジェリーミラー	工	小山 明夫	工	佐藤 学
高七	杉原 真晃	一専	平林 一隆	工	栗山 雅文	九共	中谷 彰	国短	熊倉 庸介
東文	矢口 和宏	産技	吉田 明弘	産技	間宮 明	東文	森田 慎二郎	秋専	水野 麗
福島	板橋 孝幸	岐医	小林 貴子	徳島	宮田 政徳	弓専	山尾 徳雄	京教	巻本 彰一
法政	福沢 レベッカ								

第2チーム：8月7日（火）～8日（水）

DR-A	小田 隆 治
DR-B	杉原 真晃

プログラムⅠ・Ⅱ

A班：チームA班		B班：そばかいどう班		C班：Cool 四人衆班		D班：2D班		E班：玉こん班	
人文	古川 英明	地教	齋藤 学	理	富田 憲一	人文	板垣 哲夫	地教	三浦 光哉
工	田村 英樹	農	生井 恒雄	福県	森 礼子	工	木俣 光正	医	井上 純人
高七	出川 真也	石専	丸岡 泰	仙台	長橋 雅人	農	服部 聡	工	岩田 賢一
山短	齋藤 美穂	仙台	笠原 岳人	東工	大島 武	仙台	中房 敏朗	電通	佐藤 賢一
仙台	内丸 仁	岐医	武井 泰			岐医	永井 慎	法政	櫻井 茂明

プログラムⅢ・Ⅳ・Ⅴ

A班：蔵王班		B班：ひだり馬班		C班：おくのほそみち班		D班：芋煮会班		E班：りんどう班	
人文	古川 英明	地教	齋藤 学	理	富田 憲一	人文	板垣 哲夫	地教	三浦 光哉
農	生井 恒雄	工	岩田 賢一	農	生井 恒雄	医	井上 純人	工	田村 英樹
高七	出川 真也	山短	齋藤 美穂	石専	丸岡 泰	工	木俣 光正	仙台	内丸 仁
仙台	長橋 雅人	仙台	中房 敏朗	岐医	永井 慎	仙台	笠原 岳人	岐医	武井 泰
法政	櫻井 茂明	東工	大島 武			電通	佐藤 賢一	福県	森 礼子

人文：人文学部 地教：地域教育文化学部 理：理学部 医：医学部 工：工学部 農：農学部 高七：高等教育研究企画センター
 山短：山形短期大学 産技：山形県立産業技術短期大学校 一専：一関工業高等専門学校 秋専：秋田工業高等専門学校 石巻：石巻専修大学
 仙台：仙台大学 東文：東北文化学園大学 福島：福島大学 電通：電気通信大学 法政：法政大学 国短：国際短期大学 東工：東京工芸大学
 岐医：岐阜医療科学大学 京教：京都教育大学 徳島：徳島大学 弓専：弓削商船高等専門学校 九共：九州共立大学 福県：福岡県立大学

オリエンテーション

(担当：DR-A)

1 FDの必要性

- ① 大学の社会的教育責務の明確化
- ② 大学教育を教員中心から学生中心へ移行することの教員の意識改革
- ③ 大学生の質の変化への対応

2 合宿セミナーの目的

- ① 教員個人が大学を支えること的位置付け
- ② 教育の基本的構成要素，大学における各科目の存在意義，授業設計，成績評価法などをあらためて整理する。
- ③ 教員相互の交流

3 セミナー形態

体験型のセミナーで，セミナー自体がグループ学習形式であり，参加者は，学生が運営する学生主体型授業を体験することになる。

- ① 参加者によるセミナー全体の運営
- ② セミナーのグループ構成：5班
班の構成員の年齢は幅広くする。「プログラムⅠ・Ⅱ」と「プログラムⅢ・Ⅳ・Ⅴ」で，班構成を替える。
- ③ 各プログラムに，毎回，総合司会者と記録係を置く。(各班の持ち回り)
- ④ 各班に，毎回，司会者と記録係，発表者を置く。(持ち回り)
- ⑤ 全体と各班の記録係は，各プログラム終了後に記録を提出(この記録は，コピーした後，速やかに全班に配布)
- ⑥ 参加者による相互評価：各回のプログラムが終了した時点で，各参加者が各班の発表と質疑応答に対し，5段階で評価を与える。(この評価は，毎回回収し，整理した後，速やかに掲示する。)
- ⑦ 合宿セミナーに関するポストアンケートを実施

4 各プログラムの基本的形態

- | | |
|--------------------------------|-----|
| ○各プログラムの講師による作業内容の説明 | 10分 |
| ○グループ作業 | 40分 |
| ○発表 各グループ
(各グループの発表時間4分×5班) | 20分 |
| ○全体討論 | 20分 |

全体で 90分

平成 19 年度 第 7 回山形大学教養教育 FD 合宿セミナー
「相互研鑽による教養教育の飛躍をめざして」

セミナーの形態

体験型のセミナーで、セミナー自体がグループ学習形式であり、参加者は、学生が運営する学生主体型授業を体験することになる。

- ① 参加者によるセミナー全体の運営
- ② 班構成：5 班
班の構成員の年齢は幅広くする。班は、参加者を見て、当日までに委員会で決定しておく。
「プログラムⅠ・Ⅱ」と「プログラムⅢ・Ⅳ・Ⅴ」で、班構成を入れ替える。
- ③ 各セミナーに、毎回、司会者と記録係を置く。（各班の持ち回り）
- ④ 各班に、毎回、司会者、記録係及び発表者を置く。（持ち回り）
- ⑤ 各プログラムの基本的構成
 - 各プログラムを担当する講師による作業内容の説明 10 分
 - 班ごとの作業 40 分
 - 発表 各班の発表時間 4 分×5 班 20 分
 - 全体討論 20 分
- ⑥ 全体と各班の記録係は、A 4 版 1 枚程度に記録をまとめ、各プログラム終了後に提出する。
（この記録は、コピーした後、速やかに参加者全員に配布）
- ⑦ 参加者による相互評価：各回のプログラムが終了した時点で、各参加者が各班の発表（各 4 分で計 20 分）と質疑応答に対して評価する。5 段階評価とし個人は 15 点の持ち点を有する。
（この評価は、毎回回収し、整理した後、速やかに全班に配付）

プログラムⅠ 「大学へのニーズと課題」

各班同じテーマ 次のプログラムも念頭に置く。

- 大学の分析
 - ・大学の置かれている状況分析
 - ・社会的ニーズ
 - ・長所
 - ・短所
 - ・現実的な制約・問題点、改革の必要性など

プログラムⅡ 「どのような大学にするか」

プログラムⅠの問題点等を踏まえた上で、大学の教育機能を十分に発揮するためには、これからのようなことを考え、実行していかなければならないか、具体的に提案する。

大学の理念・目標を実現するための具体的行動目標、大学の「個性」と「売り」をどうするか。すべての班が同じテーマであるが、個性あふれる現実的企画を期待する。

大学の「売り」を作る企画が求められる。

- ①理念・目標
 - ・自覚的に個性的な校風を作り出していく
 - ・個性的な大学像（理念・目標、キャッチフレーズ）
- ②方略（考えられるいくつかの方法、実現の可能性）
- ③実行計画（主な活動、資源、時期、担当、責任、具体的企画書等）
 - ・その宣伝・普及の方法（3 年計画案）
- ④評価（測定方法、学生、教員）
 - ・目標が達成できたかどうかを検証する。

プログラムⅢ 「科目設計 1 : 授業名と目標の設定」

各授業に分かれ、以下の指定された授業において適当な科目を作り、その科目名（名は体を表す科目名）とその学習目標を明らかにする。履修の時期も明確にする。

- A 班：大学の個性を発揮する授業
- B 班：地域性と関連する授業：大学と地域の連携
- C 班：国際性を培う授業
- D 班：21 世紀の諸課題に対応する授業
- E 班：職業意識と労働意欲を培う授業

プログラムⅣ 「科目設計 2 : 授業内容の作成」

学習方略

授業内容（順次性を踏まえて設計）

授業の方法（講義，ビデオ，見学，調査，討論，担当教員等）

ここでは、「科目設計 1」で作った科目の授業内容を設計する。原則として、週に 1 回 90 分授業を 15 回実施するとして、15 回分の授業内容（方略）を設計する。授業の順序と各回の内容、授業法、媒体、資源などを現実的に示す。方略を設計するに当たり、目標の修正が必要になるかもしれない。この場合は、目標を手直しする。

プログラムⅤ 「科目設計 3 : シラバスの完成」

「科目設計 2」で設計した授業内容を手直しし、「評価」の項を加え、シラバスを完成させる。

成績評価

評価項目

評価方法

評価比重（%）

各グループの課題

○プログラムⅠ

グループ	課 題
共 通	大学へのニーズと課題

○プログラムⅡ

グループ	課 題
共 通	どのような大学にするか

○プログラムⅢ～Ⅴ

グループ	課 題
A 班	大学の個性を発揮する授業
B 班	地域性と関連する授業：大学と地域の連携
C 班	国際性を培う授業
D 班	21 世紀の諸課題に対応する授業
E 班	職業意識と労働意欲を培う授業

プログラム I 「大学へのニーズと課題」

(担当：DR-A)

○各班同じテーマ プログラム II も念頭に置く。
現実的、具体的に解析する。

- 1 大学には何が求められているか？
 - ・社会は大学に何を求めているか？
 - ・学生のニーズ
- 2 大学の置かれている状況分析
 - ・そこには、どのような課題（問題）があるか？
 - ・長所
 - ・短所
 - ・その生じさせている理由・原因は何か？
- 3 現実的な制約・問題点、改革の必要性など

プログラム II 「どのような大学にするか」

(担当：DR-A)

プログラム I の問題点などを踏まえた上で、大学の教育機能を十分に発揮するには、これからどのようなことを考え、実行していかなければならないか、具体的に提案する。大学の理念・目標を実現するための具体的行動目標、大学の「個性」と「売り」をどのようにするか。すべての班が同じテーマであるが、個性あふれる現実的企画を期待する。

大学の「売り」を作る企画が求められている。

- 1 大学の理念・目標
 - ・自覚的に個性的な校風を作り出していく
 - ・個性的な大学像（理念・目標、キャッチフレーズ）
- 2 方略（考えられるいくつかの方法、実現の可能性）
- 3 実行計画（主な活動、資源、時期、担当、責任、具体的企画書など）
 - ・その宣伝・普及の方法（3年計画案）
 - ・組織論（学部、学生の入口と出口（入試制度と就職）、学長と副学長制、委員会など）
- 4 評価（測定方法、学生、教員）
 - ・目標が達成できたかどうかを検証する

プログラムⅢ「科目設計 1：授業名と目標の設定」

(担当：DR-B)

ここでの課題

シラバス作成作業の第 1 段階として、各グループごとの課題に対応した授業名と学習目標の設定を行う。

プログラムⅢ～Ⅴの各グループの課題

A 班：大学の個性を発揮する授業

B 班：地域性と関連する授業：大学と地域の連携

C 班：国際性を培う授業

D 班：21 世紀の諸課題に対応する授業

E 班：職業意識と労働意欲を培う授業

作業 1 授業名の決定：○○○○○○○○○○○○（仮称）←内容確定後、最後に決定？

作業 2 学習目標の設定

1 踏まえておくべきことから：

- (1) 教員中心ではなく、学生による学習を中心に考える（教員の果たすべき役割の再検討）
- (2) 大学に対する社会的ニーズ
- (3) 大学の全体的な教育目標

註：(1)について

大学の役割

- | | |
|-----------|---------------------|
| 講義の提供 | → 学習方法と教育方法のデザイナー |
| 学生から独立 | → 教員と学生を一つのチームと考える |
| 学力差を明確にする | → すべての学生の能力と才能を引き出す |

成功へ向けて

- | | |
|--------------|------------------|
| 伝授する資源の重視 | → 学習と学生の成功の産物を重視 |
| 資源の量と質の重視 | → 産物の量と質を重視 |
| 入学生の質の重視 | → 卒業生の質を重視 |
| カリキュラムの発展と拡大 | → 学習技法の発展と拡大 |
| 大学の質・内容の質 | → 学生の学習の質 |

使命

- | | |
|--------------|---------------------|
| 知識の提供・伝授 | → 学習を生み出し、知識の発見と形成へ |
| コース・プログラムの提供 | → 強力な学習環境の提供 |
| 教育の質の改善 | → 学習の質の改善 |
| 多様な学生への対応 | → 多様な学生を卒業させる |

教育

- | | |
|-----------|--------------------|
| 教員中心・知識伝授 | → 学生中心・知識発見 |
| 教育の質 | → 学習の質、学習効果・効率 |
| 指導者としての教員 | → 学生の才能・能力を引き出す助言者 |
| 個人的・受動的学習 | → 共同的・行動的・能動的学習 |

2 学習目標の記述

各科目の学習目標を表現することの必要性とその表現方法を学ぶ。学習の効果は、教育の受け手（学習の主体）である学生の変容で評価されるべきである。そのために、①授業の目標と②到達目標を定める。

注：授業の目標を作成する際の注意点

原則

- (1) 学習者を主語として書く
- (2) 学習の結果、いかなることができるようになるかを明示する

記述内容

- (1) 知識・技能の学習がなぜ重要か。それによって学生の要求がどのように満たされるかを明示する。
- (2) 複雑・総括的な概念を持つ動詞を用いる。
知る，認識する，理解する，感ずる，判断する，評価する，考察する，位置付ける，実施する，適用する，示す，創造する，身に付ける，等々
※単純な行動を示す動詞は用いない（述べる，列挙する，選ぶ，記載する等々）
- (3) 必要な目標分類（認知・態度・技能）を総括的に含める。

注：到達目標を作成する際の注意点

授業の目標を達成するためにどのようなことができるとよいか、具体的に明示する。

- (1) 学習者を主語として書く
- (2) 動詞を含むこと
- (3) 「理解する」のような概念的言葉ではなく、観察可能な行動を具体的に表す
- (4) 授業の目標と関連していること
- (5) 到達レベルを書く
- (6) 認知，態度，技能を分けて書く
 - 知識（認知領域）：知識を得て理解し，一定の能力を獲得する
述べる，説明する，分類する，比較する，解釈する，推論する，一般化する，適用する，結論する，批判する，評価する，等々の動詞
 - 技能（精神運動領域）：知識・能力を活かして意識的・具体的に行動する
感ずる，始める，模倣する，工夫する，行う，創造する，触れる，調べる，準備する，測定する，等々の動詞
 - 態度・習慣（情意領域）：獲得した知識・能力を，情報として相互に提供・交換し合う
行う，コミュニケーションする，協調する，示す，表現する，系統立てる，参加する，応える，等々の動詞

プログラムⅣ「科目設計 2：授業内容の作成」

(担当：DR-B)

ここでの課題

プログラムⅢ「科目設計 1」で作成した授業について、学習方法と道筋（戦略、学習方略）を明示する。具体的には、学習者が到達目標に達するために必要な学習方法の、種類と順序を示す。

作業

原則として、週に 1 回 90 分の授業を 15 回実施するものとして、授業の内容を考えてみる。その際、授業の順序と各回の内容、学習法、利用する媒体、資源などについて明示する。内容によっては、授業の目標、到達目標、さらには科目名についても変更が必要になるかもしれない。

注：学習方法の種類

- (1) 受動的学習法：講義など
- (2) 能動的学習法：①グループ討議（演習、セミナー、ディベートなど）
②実験・実習
③自習（読書、個人研究、コンピュータ活用学習など）

注：学習のための資源

- (1) 人的な面で：
- (2) 物的な面で：①場所
②媒体（スライド、OHP、標本、VTRなど）
- (3) 予算

プログラム V 「科目設計 3 : シラバスの完成」

(担当 : DR-B)

ここでの課題

プログラム IV 「科目設計 2」で作成した授業について、シラバスを完成する。

○成績評価

その位置付け

- (1) 教育評価は、学生、教員、カリキュラム（目標、学習方法の立案（方略）、評価）の三者が対象
- (2) 成績評価は、その中の一つ。

留意点

- (1) どの行動領域を評価するか
 - ① 知識（認知領域）
 - ② 技能（精神運動領域）
 - ③ 態度・習慣（情意領域）
- (2) いつ評価するか
 - ① 学習前（プレテスト）
 - ② 学習中（中間テスト）
 - ③ 学習終了後（ポストテスト）
 - ④ フォローアップ・テスト
- (3) 評価の目的
 - ① 形成的評価：学生が理解している点、理解が不足している点を発見し、学習法、教授法へのフィードバックが目的。最終評価の参考にしない。
 - ② 総合評価：到達目標に対する学生の到達度を計測する。
- (4) いかに関評価するか、複数の評価項目のウェイト
 - ① 論述試験
 - ② 口頭試験
 - ③ 客観試験
 - ④ 実地試験
 - ⑤ 観察試験
 - ⑥ 論文（レポート）

評価の持つべき性格

- (1) 妥当性：計測しようと意図する項目を計測できる方法か？
- (2) 信頼性：計測結果の再現性は良いか？
- (3) 客観性：計測者（教員）が替わっても、同じ結果が得られるか？
- (4) 効率性：経済的にも時間的にも実用的か？
- (5) 特異性：なぜ、そういう解答がなされたか分かるか？

各プログラムの記録(第1チーム)

プログラムI「大学へのニーズと課題」

◆ グループ作業記録

べにばな 班

司会者 奥間 智弘
記録者 金澤 真理
発表者 熊倉 庸介

0 モデルとなる大学像の措定

- ・ 定員確保に切実なニーズがある。
- ・ 学生の習熟度
- ・ 多様な学生のニーズに応える。

1 大学に何が求められているか?

厳しい現実

最低限 **入学 → 就職** + 付加価値

キャリア教育
インターンシップ
資格

学習に対する支援, 保護者に対するサービス
卒業生との継続的連携

これは、真に社会や学生からのニーズに合致しているのか?

2 大学の置かれている状況分析

問題点

長所 共同に学べる場, 社会に出るまで考える時間が確保できる。

短所 18才人口の減少に直面して, 高等教育の場としての大学の位置づけが変容
学生が求めるのは「わかりやすい」実践的な事
研究を阻害あるいは, 困難にする状況→時間, 予算
これが教育へのモチベーションを低下させる。

3 現実的な制約・問題点・改革の必要性など

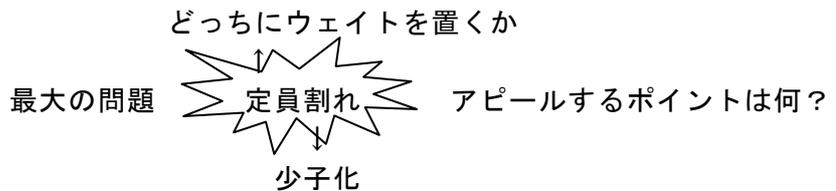
- ・ 研究・教育のバランスを「適材適所」に, 相互に協力し合える環境づくり, ただし, 組織の作り方により困難も
- ・ 大学に対する社会の理解を求める。
大学の側からも広報等の働きかけ必要。

板そば 班

司会者 栗山 雅文
 記録者 水野 麗
 発表者 森田慎二郎

0

- ・原石に付加価値をつけて…学部の性質によってはどう価値がつくかは考えない。夢を見る場であってもOK
- ・みがき直し（再教育）
- 教育…
- 研究…知の拠点



1 大学に何が求められているか?

- ・ “社会” を分ける
- ・ 送り出す親の視点…一種の投資「資格がとれる」は受ける
- ・ 受け入れる会社の視点…研修期間も長期化
 元気で明るい子・しっかりしている→自立
- ・ いわゆる「社会」の視点…重厚なサービスを期待…公務員や教員に過度の
 効率性追求, 経済性追求
- ・ 学生のニーズ…自分探し・キャリア（資格）

2 大学の置かれている状況分析

- 追い風…学生に手厚くなっている —— 長所
 逆 風…過保護 —— 企業としては鍛えてほしい
 高校・中学の中等教育でのレベル低下→大学にしわよせ
 学生に2倍手をかけても1割しかよくなるしない —— 短所（自立を妨げている）

↓
自立させる必要性 —— 親も過保護

生きる力の欠如 → 生きる力をつけさせる大学

3 現実的な制約・問題点・改革の必要性など

- 研究のお金がない, 時間がない ←—— 効率的な予算配分
 教員の労働負担増, 経費の削減 (アメリカのように教育大学と研究大学に?)
 山大のキャッチフレーズ「手厚い大学」「保護者との距離が近い大学」…高校化
- ・ 自立を促すような教育プログラムの構築
 - ・ 保護者の声と企業のを吸い上げる必要性
 - ・ 教育プログラムの見直し

ぎふのうかい 班

司会者 宮島 新一
記録者 小山 明夫
発表者 奥山 澄雄

1 大学に何が求められているか？

地方の大学をイメージして議論する

- ・ A 学生のニーズ
- ・ 専門的な技術を身につけるため
- ・ 人の役に立つ人間になりたい。
- ・ 就職のための知識を習得し資格を取る。
- ・ B 社会のニーズ
- ・ 即戦力になれる人
- ・ 人間性
- ・ マナーを身に付けた学生
- ・ 質の保証

2 大学の置かれている状況分析

長所 { 多様な学問にふれることが（教養教育）
総合大学は色々な学部の学生や教員と交流できる余裕がある
文化的な効果

短所 { 法人化によって研究費が減少
負担が多くなってきている

3 現実的な制約・問題点・改革の必要性など

学生の質の保証（Jabee）のため忙しくなってきたが社会のニーズに応じていることになる。



やまゆり 班

司会者 佐々木正彦
記録者 矢口 和宏
発表者 井上 健司

1 大学に何が求められているか？

・社会は大学に何を求めているか？

→技術，技能（理工・商船系）

→地域とのかかわり（人文・社会系）

・教員（審議会）

・学生（イベント参加）

・学生のニーズ

→資格（学生のニーズはまちまち）

→就職（地元指向が強くなっている）

人材育成

+

地域活性

2 大学の置かれている状況分析

資格取得の強いニーズにこたえられるか？

→各大学はプログラムの充実をはかっている

→スタッフの未熟さ（資格教育のプロではない）

→大学としてのあり方（専門学校ではない）

・優秀な学生集め（学力低下）

リベラルアーツ
・専門性

+

資格取得

3 現実的な制約・問題点・改革の必要性

・教員組織の中で，役割の多様化

・大学毎の性格，目標の多様化

・自己決定できる学生

花笠 班

司会者 永野由紀子
記録者 杉原 真晃
発表者 ジェリー・ミラー

1 大学に何が求められているか？

- ターゲット：×研究大学
- ・山大：地方国立大学
- ・法政：工学部が大きい。各学部によって色がちがう
- ・京教：教員養成

2 大学の置かれている状況分析

社会のニーズ

社会人として活躍する人材の育成

より広い学びの場，大きい大学に入れなくても入ることができて学べる場

(研究者養成の場ではない)

学生のニーズ

- ・「この大学だから」という個性で入学を決定するというよりは，偏差値によって決定 (山大・法政)
- ・教養教育は学生が何をどう学ぶのかを決める。
- ・大学は教養教育を受けたい学生，専門を学びたい学生等に広くカリキュラムを準備する
- ・選べない学生にはガイドラインを示すなどしていく。
- ・自分で選べる学生は3割もないのでは？
- ・教養教育の重要性を学生に訴えていくことが大学として少ないのではないか？
- ・学生自身が自分にとって教養（教養教育）とは何かを考えさせることが大切。
- ・現状，教養教育に対する不満を抱く学生多い。はやく専門に行きたい。

↑
↓

フリーにすると，学生は楽な方へ行ってしまう。

- ・教養教育の難しさ
- ・教養セミナー，少人数教育の充実 → 人間形成にも有利
- ・高校までの科目割りとは異なる社会の広い領域にわたる科目の設定

3 現実的な制約・問題点・改革の必要性など

履修届を出す前に教養教育の重要性を学生に訴える大学が少ないという現状があるので，自分で考えさせる，紙にかかせる時間をつくる。

全体会記録

総合司会者 宮田 政徳
記録者 幕田 寿典

「大学へのニーズと課題」

- A：べにばな班：学習についてのニーズと課題について主に主張
定員減による学生の学力レベルの低下，保護者・学生のニーズは企業に就職することがメイン。
就職する際に，いかに付加価値をつけられるかが評価になってしまっている。
- B：板そば班：4つの観点（親・社会・企業・学生）から課題を挙げる
親は一種の投資，企業は明るくしっかりした学生の提供，社会は手厚いサービスや研究成果，学生は自分探しの場として大学を見ている。学生への手厚いケアと過保護のバランスが難しい。
- C：ぎふのうかい班：学生からのニーズについて議論を展開
学生は手に職を付けたいと考え，企業は即戦力の提供を求めている。
優秀な教員・友人・施設を活用して，明確な目標設定をさせてやることが重要。
- D：ヤマユリ班：教育，特に資格の視点から，現状を報告
社会は人材難であり，学生は資格の取得を目指す場合が多いが，教員は資格取得のプロではない。
- E：花笠班：大学には多様なニーズに応じたフレキシビリティが必要。また，学生の将来についての考えが不安定なのでガイドラインが必要。



プログラムII 「どのような大学にするのか」

◆ グループ作業記録

べにばな 班

司会者 中谷 彰
記録者 伊藤 和明
発表者 金澤 真理

1 大学の大学の理念・目標

人間力（協調性，主体性）を育む大学

「学問追求」，「地域への貢献」，「21世紀の社会を支える人材の養成」

例）コース役割を明確化（資格の取得など）

「地域と世界に貢献」「ふつうの大学」「CMなどで認知度を上げる」

「西日本で一番めんどろ見のいい大学」

2 方略

- ・ニッチ分野をねらう
- ・地方大学では地域への貢献，つながり（地域の高校へのアピール）
- ・「本物の知識」のアピール
- ・学生に考えさせる授業方法（学生主体）探求セミナー
- ・ふつうのことをふつうでない言葉で表現
- ・「人間力」
- ・目的を明確にした授業（社会に出て損をしない方法…）
- ・インターンシップ制の利用

3 実行計画

- ・委員会の立ち上げ（学長，副学長）
- ・FD活動（ボトムアップ）
- ・学部主体の実行部隊をつくる

4 評価

- ・アンケート評価
- ・FD（委員会），キャリア支援室などが行う。
- ・教育評価

板そば 班

司会者 八木 浩司
記録者 森田慎二郎
発表者 水野 麗

1 大学の理念・目標

学力，意欲，自立，自己問題解決能力

「大学は専門学校とは違う」知の拠点

5年でつかえなくなる。

多面的な思考力を持った人格形成

社会人入学者は，モチベーション高い…段階

創成科目

体験を→自立

→モチベーションを上げる

教養教育…インターンシップ

|

測定 参加者の 組織論

宣伝 Open can 参加 + web mail

出張

保護者ガイダンス毎年



ぎふのうかい 班

司会者 平林 一隆
記録者 小林 貴子
発表者 板橋 孝幸

1 大学の理念・目標

キャッチフレーズ「使える元気大学」

“学生はもちろん、地域にも教職員にとっても、使える大学”

目標 → 学生にとっても、地域・教職員にとっても元気で使えるだけの価値をもつ大学

- 1) 自発的に活動できる、能動的
- 2) 人とのコミュニケーションがとれる（コミュニケーション能力の獲得）
- 3) （技術）将来にわたって学び続ける事ができる能力。問題解決能力の育成
- 4) 地域に貢献（活用してもらえる場的、人的資源の充実）

2 方略

- 1) 学生主体型学習を取り入れた授業により、課題探求、問題解決型学習を取り入れる。
（例：基礎セミナーの科目やグループ演習等／制約は人手、時間、教授法）
- 2) グループ学習を取り入れる（コミュニケーション能力、相互協力、能動性等）
—— フィードバックの重要性 ——
- 3) 学生と教員とのコミュニケーション能力を高めるための環境づくり。
 - ・教員と学生／教職員同士のコミュニケーションを密に
 - ・オフィスアワー等により、ニーズに応える

3 実行計画

[検討→試行→実施 ※組織的な実施を目指す]

- 1) 基礎領域、専門領域の各々における、問題解決型学習の取り入れと組織化（積み上げの重要性と教員間の相互学習）
- 2) 各授業自体が総合性をもたないといけない（カリキュラム）
- 3) 基礎知識と総合化／専門性が高いことも必要→カリキュラムガイダンスの重要性
- 4) 統合できる時間や高い教養
- 5) 大学のPR（地域、高校へ）

4 評価

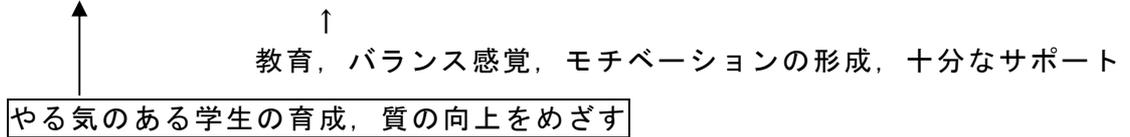
- 1) 内部評価
- 2) 外部評価～“使える元気大学”であるから、卒業生と受け入れた会社等の追跡調査
短期的評価のみでなく、年数単位／実施→3年分

やまゆり 班

司会者 山尾 徳雄
記録者 大友 幸子
発表者 吉田 明弘

1 大学の理念・目標

キャッチフレーズ…ニーズに対応したものを設定。



2 方略

学生自身の目標・設定を立てさせるプログラム

入学後よりも, 学生生活に慣れた頃に, 実のあるキャリア教育を。

↑
入学時にオリエンテーションでやっている大学の経験では「入学直後の時期では効果がない」とのこと

S A とか O B による就職説明会等

→ローカルスタンダード, 具体的な卒業生による仕事の説明, 大学教育がどう影響したか等

3 実行計画

学内の組織 (e x . S A) 等によるキャリア教育プログラム。

* 毎年学生自身に (その時の) 目標・設定を書かせて, プログラムの効果を見る。(実際にやっている大学あり)

4 評価

教育の成果は 3 年くらいではわからない。

卒業数年後にアンケートをとる。

・いつ自分の目標設定ができたか?

・大学教育や大学生活が自分の目標設計やキャリア育成にどのような影響を与えたのか?

↓
学生の大学生生活満足度が評価ではないか?

花笠 班

司会者 福沢 レベッカ
記録者 巻本 彰一
発表者 佐藤 学

1 大学の理念・目標

歴史はこれから作るもの

2 方略

地方大学の特徴を出す（方策を考える）

3 実行計画

・ 門戸開放（米国の大学例）

学力低下の学生→（補習で時間がなくなる）→システム化に向かう必要
補習授業の具体化（教育センターを作る）

学生，院生を（理系なら可）

出口は厳しくなる。

社会的認知が必要

社会人を含めて，門戸開放（学びたいときにいつでも学ぶ）

完全な米国型はムリ

入試は全廃しない

青森県立大型？

単位が少ないと イエローカード，レッドカードただし，学ぶ意力が出れば
戻れる。

・ 高い人間性（教養教育）

研究計画，人生計画

ボランティア活動

山間部の農業

災害時ボランティア

環境問題

インターンシップ

大学内の省エネ

4 評価

在学時のアンケート

卒業時のアンケート

進級度でのチェック

別枠 OBとの関係を密に

全体会記録

総合司会者 瀧浦 晃基
 記録者 間宮 明

- A 人間が [共調性・主体性] を育む大学→自覚的学び→主体性を育む方法を検討→在学生・卒業生
 働く姿をイメージ 実施体制づくり 就職先 自律的
- B 専門学校ではない→基礎学力向上→補講 → オープンキャンパス
 教養再評価 副専攻 参加者の入学率
 体験学習 モチベーション メーリングリスト
 インターンシップ 履修者数
 フィールドワーク
- C 誰にとっても「使える元気大学」→問題解決学習→取り入れ, 組織化総合統合→卒業生の追跡
 →受け入れ企業追跡
- D サポート, バランス感覚, モチベーション →目標設定 →何のために →アンケート
 (オリエンテーション) 卒業3年後
- E 門戸開放→入試を下げる→補習→基礎学力向上→アンケート在学中, 卒業時
 →セミナー →発表

↓

学生の意識低下 (学力, 自立力)

- ・大学が全てをかぶる。負担増
- ・生き残りを考えるのは, 大学だけか?
- ・地域連携

役割のバランスを再認識すべき→大学として受け止めなければならない
 →自分たちが勉強できる環境…負担減

↓

早めに, ゼミ, 卒業研究に入れる (態度が変化)

↓

大学全体の連携も考える必要あり

↓

教員側の負担増

(新しいプログラムで, 大きな負担に
 ならないように!!)

↓

大学院で行うことで負担減

プログラムⅢ 「科目設計1:授業名と目標の設定」

◆ グループ作業記録

たなばた 班

司会者 瀧浦 晃樹
記録者 金澤 真理
発表者 杉原 真晃

コンセプト

低学年，或いは3，4年でも可
少人数教育
主体性を養うため，自己選択
グループ学習

手法

実地見学を組み込む（工場，施設，ボランティアetc）
企画，実施計画も学生に主体的にさせる。

学習目標

テーマを主体的に選択
コミュニケーションに技法を学ぶ
大きなテーマを決める，その中から選択
文献収集の仕方，調査方法
討論，施設見学

『手厚いけど過保護じゃない！』

ブラボー 班

司会者 幕田 寿典
記録者 平林 一隆
発表者 小林 貴子

議論の前提として、タイトルの「地域性と関連する授業」を中心に取り上げる（大学と地域との連携はやや異なる分野と思われる）

●授業名「地域性をとらえ，地域性を生かす」

●学習目標の設定

- ・学習目標：学生が自ら地域性をとらえ，その多面性を認識し，そこから，地域性を生かすことを考える力を養うことを目標とする。
- ・到達目標：
 - ・多様なものから構成されている複合的内容を調査・分析比較することができる。
 - ・地域の特徴すなわち，他地域との違いがわかる→地域の強みを知る。
 - ・そのために多面的要素についてフィールドワークを通して調査する
 - ・何に活用できるかかんがえてみる。
- ・地域性の認識，比較，評価，分類→地域性を表現できる
- ・大学が取り組むメリット
 - ・多面的分野にわたり，専門的な方法で地域分析ができる。

チームミラー 班

司会者 ジェリー・ミラー
記録者 宮島 新一
発表者 永野由紀子

山形には外国人が多い。ただし，アジア
世界かアジアか，両方扱うが，重点を考える。

日本文化を

国際性の必要性があるかを最初に問う

食べもの，映画，音楽

相違点，共通点

タイトル「これであなたも国際人」

アジアからの留学生の存在を考える。

イスラム，仏教，ヒンズーも考える。

アジアの範囲を考える

水シャワー 班

司会者 奥山 澄雄
記録者 中谷 彰
発表者 小山 明夫

・ 21世紀の諸課題（テーマ）

- ・ エネルギー問題（石油のとりあい）
 - ・ 人に問題
 - ・ 環境問題
- ・ 15週で何テーマか行う

・ 授業名の決定

私たちの21世紀の諸課題を考える

- ・ 学習目標の設定—理解し説明することができる
 - ・ 自分たちのおかれた状況をよく考える
 - ・ 過去にどういう歴史（産業革命から）をたどったのかをおさえる。意識させる。
 - ・ もっと根本的な知識を与える
 - ・ 世界人口の過去からの推移

・ 学習目標

- ①過去からの現代の課題の推移を調べ、現在の状況を正しく認識する。
- ②フィールド調査を通じて課題を身近に理解することができる。
- ③諸問題を解決する意識を身に付ける。



ラ・フランス 班

司会者 佐藤 学
記録者 巻本 彰一
発表者 佐々木正彦

〈職業意識と労働意欲を培う授業〉

①授業名の決定

事前事後指導付きインターンシップ

②学習目標の設定

事前授業（指導）
インターンシップ
事後授業（指導）

をセットにする

事前…年の近いOBの話を数回

ビジョンを持たず…最近モチベーションの低い学生が多い。

働くこと…自分の長所を理解して、職業を選択する力を養う

人生設計…社会へのかかわりあい、人生設計できるようにする。

仕事の流れ…仕事というものを理解

インターンシップ…実際に体験

事後…全体で討議して他人の考えも学ぶ

レポートを提出させて評価する。

職業（働くこと）を基にして社会にどのようにかかわっていくかという全体的な人生設計について理解する。



全体会記録

総司会者 間宮 明
記録者 栗山 雅文

A. たなばた（大学の個性）

授業名 大学入門，社会人入門・・・少人数ゼミ
（1年生）（4年生）

目標 主体性，問題発見，調査能力
表現力，コミュニケーション力

教員の仕事・・・コメント，情報提供，段取りなど

B. ブラボー（地域性）

自然，社会，歴史，産業

出身地の異なる学生→調査，フィールドワーク

目標，構成要素，明確化，活用を考える。

C. チームミラー（国際性）

授業名 これであなとも国際人

目標 国際性とは？比較の視点（家族，映画，スポーツ他）
アジアの視点

経済格差，宗教対立

ディスカッション（学生主体），調査，在住外国人のゲストスピーカーの活用
外国人労働者，国際結婚，留学生

D. 水シャワー（21世紀の諸課題に対応）

エネルギー，環境，人口（各5週をあてる）

授業名 私たちの21世紀の諸課題を考える。

目標 文献調査（過去～現在の課題）

フィールド調査（身近な問題）

解決意識を培う

発表

D. ラ・フランス（職業意識，労働意欲）

授業名 事前事後授業付きインターンシップ実習

目標 職業意識，労働意欲を培う

事前の出前授業（職業意識）→インターンシップ（労働意欲）→レポート，
全体ディスカッション

プログラムⅣ 「科目設計2:授業内容の作成」

◆ グループ作業記録

たなばた 班

司会者 杉原 真晃
記録者 板橋 孝幸
発表者 奥間 智弘
福沢 いづか

『大学生入門』

- 1 オリエンテーション, 班決め
- 2 } テーマ設定
- 3 }
- 4 テーマ (設定) 発表
- 5 } 調査方法のレクチャー
- 6 }
- 7 }
- 8 } 実地調査
- 9 }
- 10 中間発表
- 11 分析・再調査・総合
- 12
- 13 まとめ (発表準備)
- 14 発表
- 15 相互評価

(例)

5人・3班
高齢者問題・工場見学

今後の学習 (調査) 計画も発表
図書館, データベースの使い方
パワーポイント, レジユメの作成方法
施設・役所 (行政)
マスコミ, 図書館
工場見学, インタビュー



ブラボー 班

司会者 吉田 明弘
記録者 伊藤 和明
発表者 八木 浩司

授業の骨組

- 1～2回 ・講義の具体的な考え方（定義）と具体例を示す。
・何を見るべきか（問題点のあぶりだし）
- 3回 ・イメージング（自分たちの地域に対する感じ方など）
- 4回 ・教員とともに地域を歩く（問題点指摘）
セミナー形式で～15名／1教員 土日を利用
- 5～8回 ・フィールドワーク・文献 4回
- 9回 ・中間発表 { 全体での報告会を行い，地域についての相互理解行う
軌道の修正
- 10回 ・講義：地域を活かす事例の紹介
- 11～14回 ・再調査（発表準備を含む）
- 15回 ・今後の提言 レポート提出（グループ毎）コンペ

地域を活かす計画書づくり

発表した企画書を修正し，レポートとして提出する。

予算：地図，デジタルカメラ，パソコン(貸し出し可能なもの)，インターネット，交通費(自費)
保険の確認

人：教員，地域の方（行政・工・農などボランティアで行っていただける方



チームミラー 班

司会者 間宮 明
記録者 永野由紀子
発表者 栗山 雅文

・国際性を培う授業

授業名：これであなたも国際人！

受講者 30 人

- 1) 全体討議：テーマ 国際性とは何か？
ニュースや新聞記事や論説等の資料をもとに、国際性が必要な時代状況を認識する。
- 2) グループ学習：テーマ別調査・分析・発表
6人×5グループ
①家族②食文化③スポーツ
④映画⑤音楽 ・比較の視点，歴史の視点
- 3) 共通認識：外国人労働者，国際結婚，留学生問題に精通したゲストスピーカーによる講義
- 4) 映画をとおした経済格差・宗教対立の現実を知る。
- 5) 共通認識：ディスカッションをとおして国際性とは何か，アジアという視点の重要性についての認識を深める。
→ボーダーレスではなく，互いの固有性を尊重した共生へ



水シャワー 班

司会者 森田慎二郎
記録者 山尾 徳雄
発表者 中谷 彰

「私達の 21 世紀の諸問題を考える」 1 年生, 前期

学習目標

- ・ 過去から現代の課題の推移を調べ, 現在の状況を正しく認識する。
- ・ フィールド調査を通じて, 課題を身近に理解することができる。
- ・ 諸問題を解決する意識を高め, 実行に移せる。

ねらい

討論, 文献・フィールド調査を通じて諸問題を解決し, 理解する能力を身につける。

キーワード

エネルギー, 人口, 環境, 21 世紀

【授業計画】

授業方法

学生による班毎の調査, 研究, 発表
教員による講評

日程

1. オリエンテーション
2. エネルギー問題について, 班毎にテーマを決める
3. (外部講師) 又はフィールド調査
4. 発表についてのまとめ
5. 発表
6. 人口問題についての外部講師の話
7. 人口問題についてのテーマ決定
8. 文献調査の報告会
9. 発表についてのまとめ
10. 発表
11. 環境問題についてのテーマ決め
12. 文献調査の報告会
13. フィールド調査
14. 発表についてのまとめ
15. 発表

ラ・フランス 班

司会者 熊倉 庸介
記録者 水野 麗
発表者 井上 健司

・授業の順序

- ・事前セミナー 3 回

オリエンテーション 45 分 → 事前アンケート

目的・内容・評価の基準

各 1 / 2 コマずつ 5 分野

- ・インターンシップ 10 回 2 種を選択

- ・公務員
- ・流通・販売
- ・金融
- ・製造業
- ・建築・土木

- ・事後学習 2 回

学生が主体的に発表
レポート提出 → ディスカッション
労働意欲が高まったかアンケート

お話いただくポイント

- ・職場のマナー
人間関係
チームワーク
- ・職業をどうとらえるべきか
- ・人生設計
- ・その会社の特性
- ・一日のタイムスケジュール
- ・一年の流れ
- ・会社の浮き沈み
- ・資格や研修

評価

- ・受け入れ企業からの評価
- ・レポート、発表の評価
 - ・観察力（質、量）
 - ・批判力
 - ・理解力、記述力
 - ・人生設計のヴィジョンの明確さ

全体会記録

総司会者 奥山 澄雄
記録者 大友 幸子

- A. たなばた班（大学生入門）－主体性を身に付ける
3本柱（テーマ決定，調査，発表）5人×3班
1 オリエンテーション，班決め
2－3 テーマ設定（例）高齢者問題，工場見学
4 テーマ設定発表 今後の学習計画の発表
5－6 調査方法のレクチャー
7－8 実地調査
10 中間発表
11－12 分析，再調査，総合
13 まとめ
14 発表
15 相互評価
- B. ブラボー班（地域性をとらえ，地域性をいかす）
1・2）受動的学習：講義2回…とりかかり
3）発表形式：学生が見た大学のある街のイメージ
出身地との比較，地元出身者との考えのちがい
4）フィールド調査（教員と。とらえかたを学ぶ）
5～8）フィールド調査（グループ4～5名による）…テーマごとに街をとらえる
9）中間発表…地域性の明確化
10）地域を生かす事例
11～14）地域性を生かす企画書づくり
15）企画コンペ
- C. チームミラー（これであなたも国際人！）
・6人1グループ計30名の少人数制ゼミ形式
1）国際性の必要性の認識
2）テーマ別調査（家族，食文化，…）
3）在住外国人によるコメント
4）アドヴァンス：アジアの視点の重要性，経済格差，宗教対立
↓
学生自身の調査・分析→全体の総まとめ
あらためて，国際性，アジア，日本を知る
- D. 水シャワー班（私たちの21世紀の諸問題を考える）
・エネルギー問題，人口問題，環境問題
・グループ討論，文献調査，フィールド調査→理解し，解決能力を身につける
- E. ラ・フランス班（職業意識力UPセミナー）
目標：職業体験→働くとはどういうことかを実感し，労働意欲を向上させる。
・事前セミナー（オリエンテーション，職種説明（外部から）5人×1／2回）
・インターンシップ（2種くらいの職種）
・事後セミナー（レポート+学生全体でディスカッション）

プログラム V 「科目設計 3: シラバスの完成」

◆ グループ作業記録

たなぼた班

授業科目名『大学生入門』					
担当教員： 学科全教員					
担当教員の所属：					
開講学年：1 年	開講学期：前期				
開講対象：	科目区分：				
単位数：2 単位	開講形態：演習				
【授業概要】 ・テーマ 大学で学ぶために必要な学習スキルを身につける！ ・ねらい 主体性をもつ（テーマ設定・選択・調査・交渉 etc） 問題発見能力を身につける 問題に対して必要な調査能力（リサーチテラシー）を身につける 表現力（プレゼンテーションスキル）を身につける 他人の意見を聞いて、それに対応した意見を言う（コミュニケーション） ・目標 <table border="0" style="margin-left: 40px;"> <tr> <td>3本の柱！</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ決定 ・調査 ・発表 </td> <td style="font-size: 2em; vertical-align: middle;">}</td> <td>スキルを身につける！</td> </tr> </table>		3本の柱！	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマ決定 ・調査 ・発表 	}	スキルを身につける！
3本の柱！	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマ決定 ・調査 ・発表 	}	スキルを身につける！		
・キーワード 主体性・リサーチリテラシー・プレゼンテーションスキル・コミュニケーション力					
【授業計画】 ・授業の方法 少人数クラス（1 グループ 5 人×3）によるグループワーク ・日 程 <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション・班決め（5 人×3） 2. ～3. テーマ設定 4. テーマ設定発表 5. ～6. 調査方法のレクチャー 7. ～9. 実地調査 10. 中間発表 11. ～12. 分析・再調査・総合 13. まとめ（発表準備） 14. 発表 15. 相互評価 					
【学習の方法】 ・受講のあり方 グループ内での役割を全うすること ・予習のあり方 各グループの進行状況によって適宜指示する ・復習のあり方 各グループの進行状況によって適宜指示する					
【成績評価の方法】 ・成績評価基準 グループに対する評価：内容とスキルについて →教員 6 割 学生 2 割 ・方法 個人に対する評価：役割を果たしたか →グループ内で学生が相互に自己評価：2 割					
【テキスト】 なし（必要に応じて指示する）					
【参考書】 各自・各グループで探すこと					
【科目の位置付け】 大学生活の出発点としての導入科目					
【その他】 ・学生へのメッセージ 自分で問題を設定し、解決すること。この作業によって皆さんの成長を期待します。 ・履修に当たっての留意点 勝手に休むとグループに迷惑がかかるので注意すること！ ・オフィスアワー ・担当教員の専門分野					

フラボー班

授業科目名『地域をとらえて地域を生かす』 担当教員： 担当教員の所属： 開講学年：1 年 開講学期：後期 単位数：2 開講形態：セミナー 開講対象：全学部 科目区分：総合	
【授業概要】 ・テーマ 身近な地域の特色をとらえ、地域の活性化に生かしていく ・ねらい 地域を構成する複雑で多様な要素の中から、その地域を特色付ける要素を読みとり、地域性を明らかにする。それをふまえて、地域を活かす活動につなげる。 これから暮らす場所で、その場所の良さを見つける力を養う。 ・目標 生活地図が書ける（調査、資料読解、分析などの力） 他人に教えることができる。 プレゼンテーション、及びディスカッション能力が身につく 企画力などを身につける ・キーワード 地域性、多様性、フィールド調査	
【授業計画】 ・授業の方法 フィールドワークを基に、調査結果を分析し、考察、まとめ、発表する そのまとめをふまえ、地域、貢献につなげる企画の提案 ・日 程 1～2 回 地域性の考え方（講義） 3 回 イメージの発表 4 回 地域分析フィールドワーク導入（教員と一緒にまわる） 5～8 回 フィールドワーク 9 回 中間発表 10 回 他地域の事例 11～14 回 再調査「地域を活かす」ための企画書づくり 15 回 企画書のコンペ発表会	
【学習の方法】 ・受講のあり方 役割分担を明確化し、知識を共有し、相互協力をとろう 好奇心を持って街に出よう。 ・予習のあり方 日頃から地域への関心を持つようにする。 テーマの明確化（フィールド調査） ・復習のあり方 データ整理・特徴的事象の抽出	
【成績評価の方法】 ・成績評価基準 レポート（毎回のフィールドワーク）4 回 20 点（5 点×4） プレゼンテーション（イメージ、中間、企画）3 回 60 点（20 点×3） 企画書 20 点 ・方法 （相互評価）地域性の発明、理解ができたか。 フィールドワークへの積極的参加	
【テキスト】 各自がフィールド調査、文献調査を通して見つけ出す。	
【参考書】 各自がフィールド調査、文献調査を通して見つけ出す。	
【科目の位置付け】 総合的人間力の育成	
【その他】 ・学生へのメッセージ 街を楽しもう ・履修に当たっての留意点 欠席はしない ・オフィスアワー ・担当教員の専門分野	

チームミラー班

授業科目名『これであなたも国際人！』 担当教員： 担当教員の所属： 開講学年：1 年 開講学期：後期 単位数：2 開講形態： 開講対象：全学部 科目区分：総合			
【授業概要】 ・テーマ 国際性とは何か ・ねらい 国際性を培う事 ・目標 世界におけるアジアの認識 アジアの範囲を理解 アジアにおける日本の認識 ・キーワード 経済格差・宗教対立・異文化・共生			
【授業計画】 ・授業の方法 グループ学習（調査分析，発表，討論） ゲストスピーカーによる講演（討論） ドキュメント映画の視聴 在住外国人へのインタビュー ・日 程 1. オリエンテーション 2. 国際性の必要性討論 3. テーマ別のオリエンテーション 4. 中間発表（グループ毎） 5. テーマ別発表（家族） 6. テーマ別発表（食文化） 7. テーマ別発表（スポーツ） 8. テーマ別発表（映画） 9. テーマ別発表（音楽） 10. ゲストスピーカー講演＋討論 11. ドキュメント映画視聴（経済格差） 12. ドキュメント映画視聴（宗教対立） 13. ドキュメント映画視聴（未定） 14. ゲストスピーカー講演＋討論 15. まとめ「国際性とは何かの討論」			
【学習の方法】 ・受講のあり方 ・予習のあり方 ・復習のあり方			
【成績評価の方法】 ・成績評価基準 アジアの範囲への理解 経済格差，宗教対立の理解 ・方法 将来への提案 発表 20 % インタビュー報告書 20 % レポート 60 %			
【テキスト】			
【参考書】			
【科目の位置付け】			
【その他】 ・学生へのメッセージ ・履修に当たっての留意点 ・オフィスアワー ・担当教員の専門分野			

水シャワー班

授業科目名『私たちの 21 世紀の諸問題を考える』 担当教員： 水野車輪 (Mizuno Shawa) 担当教員の所属：FD 学部 開講学年：1-4 年 開講学期：前期 単位数：2 開講形態：セミナー 開講対象：全学部 科目区分：総合領域	
【授業概要】 ・テーマ ①エネルギー問題 ②人口問題 ③環境問題 ・ねらい グループ討論，文献調査，フィールド調査を通じて，各問題を理解し，解決する能力を得る。 ・目標 ①過去から現代への課題の推移を調べ，現在の状況を正しく認識する。 ②フィールド調査を通じて課題を身近に理解することができる。 ③諸問題を解決する意識を高め，能力を身につける。 ・キーワード エネルギー，人口，環境，21 世紀	
【授業計画】 ・授業の方法 ・学生によるグループごとの発表 ・教員による講評 ・日 程 <u>エネルギー問題</u> 1. オリエンテーション，テーマ決め 2. 文献調査の報告会 3. フィールド調査 4. 発表についてのまとめの会 5. 発表 <u>人口問題</u> 6. 外部講師 7. テーマ決め 8. 文献調査の報告会 9. 発表についてのまとめの会 10. 発表 <u>環境問題</u> 11. テーマ決め 12. 文献調査の発表会 13. フィールド調査 14. 発表についてのまとめ 15. 発表	
【学習の方法】 ・受講のあり方 全回出席（やむを得ない理由による場合は除く） ・予習のあり方 グループ内での分担作業を確実に実行してくること。 ・復習のあり方 各グループの成果を確実にまとめておくこと。	
【成績評価の方法】 ・成績評価基準 グループ発表 { ①過去から現在への課題の推移について認識している。 5 ②フィールド調査が適切に行われている。 5 ③課題に対する認識が明確である。 5 ④プレゼンテーション評価 5 ⑤資料内容（アブストラクト） } ・方法 レポート ①他のグループの成果を取り入れて発表させているか。 10 ②各グループの発表が正確に述べられているか。 10 ③論理的に述べられている。 10 ④引用文献等により客観性が保証されているか。 10	
【テキスト】 特になし	
【参考書】 課題に応じて各自が探す。	
【科目の位置付け】 総合領域	
【その他】 ・学生へのメッセージ 君達の問題だよ。君達の ・履修に当たっての留意点 グループ内の協力が必要。 ・オフィスアワー 月曜，16：30～18：00 ・担当教員の専門分野 環境学	

ラ・フランス班

授業科目名『職業意識力UPセミナー』 担当教員： ラ・フランス（3名） 担当教員の所属：FD 開講学年：1年 開講学期：前期 単位数：2 開講形態：演習 開講対象：1年生 科目区分：一般教育	
【授業概要】 ・テーマ 職業体験を通して働くことの意識を高める。 ・ねらい 事前セミナー，事後セミナー，職業体験をセットとし，具体的に働くことへの意識を高める。 ・目標 職業体験を通じて働くことは何かを実感し働くことについてのビジョンを明確にすることができる。 ・キーワード インターンシップ，職業意識，人生設計	
【授業計画】 ・授業の方法 I. 事前セミナー(事前アンケートを含む) (3回) II. インターンシップ (2×3日=6日) III. 事後セミナー (2回) ・日 程 I. 事前セミナー オリエンテーション 1 / 2コマ 職業別事前セミナー1 (公務員，流通・販売) 職業別事前セミナー2 (金融，製造業，土木建築) } (1 / 2コマ×5) II. インターンシップ 事前セミナーから2種の職業を選択し，訪問する。事後にレポート提出 III. 事後セミナー 体験レポート概要発表会 学生のディスカッション (グループ学習+ディスカッション)	
【学習の方法】 ・受講のあり方 ①インターンシップ事前アンケート提出 ②「職業体験日誌」への記入及び提出 ③レポートの作成及び提出 ④レポートの概要発表 ・予習のあり方 ・復習のあり方	
【成績評価の方法】 ・成績評価基準 ①職業に対する理解が進んだか。 ②十分な観察をしているか。 ③体験で得た内容を自分のキャリア設計の中でとらえて適切に記述しているか。 ④発表及びその内容は十分か。 ⑤グループの学習活動に積極的に参加したか。 ・方法 ①職業体験日誌 (20%) ②レポート (40%) 及び発表 (20%) (グループ学習活動) ③受け入れ先からの報告 (20%)	
【テキスト】 なし	
【参考書】 図書館等での関連図書	
【科目の位置付け】 選択科目	
【その他】 ・学生へのメッセージ あなたの職業意識を高めてみませんか？ ・履修に当たっての留意点 最初のオリエンテーションへの出席，提出物の期限厳守 ・オフィスアワー 週2時間の設定 実習中のトラブルが生じた時は担当者へ連絡。 ・担当教員の専門分野	

全体会記録

総司会者 熊倉 庸介
記録者 井上 健司

【科目設計 3 : シラバスの完成】

プログラムⅣ「科目設計 2」で作成した授業について、シラバスを完成する。質疑

A : たなばた班

B : ブラボー班

①ねらいの「地域を活かす」に到達するには、具体性、現状認識が重要では？

C : チームミラー班

①評価（レポートの点数化）の方法は
→基準を設けているので、それに沿って。

②学生一人一人に考えさせるしかけは？

③60点以上とれば国際人と言えるか？

→この講義はあくまで導入

D : 水シャワー班

①平和安全保障も大切では？3つを取り上げた理由は？

→複雑すぎるため

E : ラ・フランス班



各プログラムの記録(第2チーム)

プログラム I 「大学へのニーズと課題」

◆ グループ作業記録

チームA 班

司会者 出川 真也
記録者 内丸 仁
発表者 齊藤 美穂

1 大学に何が求められているか?

- 産学連携による地域活性化（短期的）
- 大学から社会へ還元（会社員としても）
- 地域社会からのニーズ（資格など）

2 大学の置かれている状況分析

- ・本来あるべき長所が短所になってしまう。
Ex)学部ごとの地域社会や学生からのニーズを1本化しようとする、逆に短所になる。
情報交換不足も原因の一つと考える。
- ・ニーズと学生の認識とのズレ
社会（企業）の求める人材と学生の認識が違う。

3 現実的な制約・問題点・改革の必要性など

- ・オリエンテーションを充実させる。
- ・大学内での共同ミッションを行う。
- ・周辺化されたところからのニーズに対して、公共的な取り組みを行うことも必要ではないか？



そばかいどう 班

司会者 齋藤 学
記録者 丸岡 泰
発表者 笠原 岳人

1 大学に何が求められているか?

- ・ 総合大学／単科大学のちがい
- ・ 地域・立地

石巻では…関東では足りない教員，地元では就職なし

1. 地域の経済性（鶴岡）
2. 文化技術の向上

健康支援地域への支援 体育教員

基本的な理念（学部・学科）を守るべき

学生のニーズ

医療促進は明らか

教員志望は低下

地域を支えたい

ホンネは最小限の努力で卒業 { 就職が目標

就職への意欲（教育への熱意か）

学力差が大きい（考えが多様すぎ）

長所…教育機会が増えた。

短所…学習への動機付けが弱い。

Cool 4人衆 班

司会者 大島 武
記録者 森 礼子
発表者 長橋 雅人

山形大学を中心にすえて，他大学の特色も加える

1 大学に何が求められているか?

大きな大学は地域の意見も取り入れることが大切

—山形大学—歴史もない。旧帝大でもない。

- ・ 勝ち組ではない。
- ・ 就職活動—専門のユニットがある。
- ・ 医学部は地元の医療を支えているという思いがあるが，他の大学は地域とうまく結びついているとは思えない。

2 大学の置かれている状況分析

長所 ・ FDに熱心である。

・ 学生間のつながりが深い。一人脈に結びつく。

・ 総合大学（分散キャンパスをメリット化する。—山大の短所を長所に変える）

・ アドバイザー制（プライベートな分野でも）

短所 ・ キャンパス間の結びつきが浅い

・ 理系の場合は留年率が高い。

2D 班

司会者 板垣 哲夫
記録者 服部 聡
発表者 永井 慎

1 大学に何が求められているか？

社会は大学にどのようなニーズを求めているか？

最終学歴なので→役立つ人材を作してほしい。社会的人材

→実際は…！？

☆求めている人物

1) 学生 2) 親 3) 社会 4) OB→例早慶→寄付 卒業生を大事にする。

3-①(地域)社会

3-②職業社会

☆具体的には…？

2) ちゃんとした職につかせられるのか否か(親の期待)

3) 地域の学校(理科教育)

地域の企業(基礎専門教育)

地域の住民(公開講座+α?)

1) 何の役に立つのかわからないまま大学に在籍している。

2) 大学入学→資格取得(就職に直結)

大学のカラー, 授業料の安さ。

4) OBをまとめるのも大学の役割←企業に入る

2) 授業料高くなってきている。経済的な負担(弱者)

→支援が必要？

一方, 少子化→1人あたりの親の学費負担は減っている。

2 大学の置かれている状況分析

①課題(問題) ②長所 ③短所 ④理由・原因

→具体的 A 予算(教育・研究) →物品(理系・文系)

B 少子化(市場原理の導入)

3 現実的な制約・問題点・改革の必要性など

予算の獲得, 定員の確保

玉コン 班

司会者 岩田 賢一
記録者 三浦 光哉
発表者 井上 純人

1 大学に何が求められているか?

- (大学) ・学生にプラス α を付けてあげる。
 - ・多様性に応えたい
- (学生) ・いろいろな内容を吸収したい。
 - ・大学のブランドがほしい
 - ・専門的な知識
 - ・資格をとりたい。

2 大学の置かれている状況分析

- ・長所 総合大学だと連携ができる。
- ・短所 ・資格の乱発
 - ・専門性がうすまる。

3 現実的な制約・問題点・改革の必要性など

- ・就職先の確保
 - ・インターンシップ等の実施
 - ・社会の求めるニーズに応える(例えば大学院, 実習など)→学生にとっては費用の負担増

改革

- ①部局間の横断ができるような組織作り
- ②まずは, 個人レベルの研究で融合させていく。



全体会記録

司会者 田村 英樹
記録者 古川 英明

1 大学に何が求められているか？

産学連携による地域活性化。学生が地域に入るといふ仕方で地域貢献(公開講座へのneeds)

学生は資格, 就職を求めている。親…安い授業料

会社は, 就職してくる学生に対して, 専門基礎の向上を求めている。

資格については, 大学以外の専門学校にまかせて, それ以外のものが, 大学に求められているのではないか。例えば, NPO, NGOと連携すること。

2 大学の置かれている状況分析

少子化は, 高等教育を受ける機会の増大につながる。————— これは長所。

他方で学生に二極化が生じている。①motivationの高い学生と②単に大学卒の資格を得るために入学する学生←対応は？(理系では卒論研究をはずすことはできない)

学生が資格のみに関心をもつという傾向は, 教員の質の低下を招いている。

分散キャンパス…Internetによる授業も, liveの授業には負けるという実感アリ。

総合大学としての広い人脈を築けるのは長所。しかし, 現状は築けていない。

3 現実的な制約・問題点・改革の必要性など

オリエンテーションを充実させる。学習, 就職に対する動機付けを早期に行う。

幾つかの学部にまたがる共同のproject, missionを行う。

企業との共同研究, 科研費で予算確保する。

シニア層の入学によって定員確保する。

プログラムII 「どのような大学にするのか」

◆ グループ作業記録

チームA 班

司会者 内丸 仁
記録者 齊藤 美穂
発表者 出川 慎也

1 大学の理念・目標

キャッチフレーズ 『地域に目を向け、外に開かれたグローバルな新たな価値を発信』
・多様性・自然との共生・大学の立地を活かす特性

2 方略

山形の地域資源・特性を生かした授業

3 実行計画

地域の風土に根ざした工学研究教育

ものづくりの精神（伝統工芸・ものづくり職人）

他学部連携（他キャンパスとの交流）

学生が企画づくり

担当：工学部（米沢）

学長，学部長連携

宣伝：メディア・他県の学生

4 評価

- ・やってみての感想レポート
→行政・地域などで賞の設定，採択。
- ・地域先生 20名
- ・交流人口 50名以上



そばかいどう 班

司会者 生井 恒雄
記録者 齋藤 学
発表者 武井 泰

1 大学の理念と目標

(総合大学の場合)

全学の大目標と各学部の大目標とが連携する様な工夫が必要。

私学はもともと有している



国立は新規創出の必要

2 方略・実行計画

「教育実績」に関する評価システムの構築

(私学においては研究実績以上に重視するケースも有)

3 実行計画

HP 高校訪問, 公開講座 (一般向け, 高校向けの差別化)

理念, 教育内容を的確に伝えるための特徴的なコンテンツ, プログラムの開発

4 評価

学生の満足度, 親の満足度

学生の目標の達成 ↔ 就職

(※企業, OBからのアンケート活用)

評価に活用する



Cool4人衆 班

司会者 森 礼子
記録者 大島 武
発表者 富田 憲一

1 理念・目標

A 学生の面倒見がよい，きめ細かい指導←大きな大学だからこそ

B 学生が主役の大学←主体性を重んじる…企画力，コミュニケーション能力の

Ex) 仙台大学の運動会…全て学生が立案・運営
教員の専門よりも学生のニーズに合わせたカリキュラム編成

2 方略

- A アドバイザー制の全学部水平展開→学生のケア，ドロップアウトの防止
- ・ 専門課程の段階的紹介←小規模大学では専門科目前倒し
 - ・ オリエンテーションキャンプ←早期に大学に慣れさせる。

B カリキュラムの再検討

3 実行計画

A アドバイザー制

1 年目	理学部のシステムを全学にオリエンテーション
2 年目	一部の学部で先行実施
3 年目	全学部で本格展開→検証

※全学部のアドバイザー制を統制する組織作り
健康管理センター等の専門機関とも連携

B カリキュラム再検討

1 年目	学生ニーズのリサーチ／他大学の授業内容研究 (学生ディスカッション)
2 年目	各学部 1 つの目玉・科目 (専門? 基礎)
3 年目	目玉科目の試行実施

※学部毎にワーキンググループ立ち上げ←学生の代表者に協力依頼

4 評価

A アドバイザー制→年 1 回の全学報告会 (定量，定性データ)

→教員へのヒアリング，学生アンケート

B カリキュラム再検討→授業アンケートの検証，長いスパンでの調査 複数教員の関与

2D 班

司会者 木俣 光正
記録者 永井 慎
発表者 板垣 哲夫

1 大学の理念・目標

- ・ 大学は個人教育・研究者の集団である。
- ・ 教員は自分の研究を進め、その研究にて教育を遂行する。

2 方略

- ・ 個々が、専門性を持って、強くなるため、集団内での個々のネットワークを強くする必要がある。
- ・ 個性の把握

3 実行計画

組織的には、ボトムアップで、まとめて組織とする方法が良い。

4 評価

(目標であり、検証される)

- ・ 学生の就職 ↑
- ・ 受験生の倍率 ↑
- ・ アンケート調査 ↑
- ・ ネットワーク力 ↑
- ・ 個性力 ↑



玉コン 班

司会者 佐藤 賢一
記録者 櫻井 茂明
発表者 岩田 賢一

1 大学の理念・目標

社会に送り出していく

キャッチフレーズ『(率先的に)教員から楽しめる大学』

世界の第一人者がいると人が集まる。

山形県内への貢献

地域→多様化

万人受けしても人はこない。

人が培えばよい。

COE (高畠町, 検診, データとしてだせる)

アピールが足りない

佐賀大学：地域研究：他の人を持ってきて研究してもらおう。

他者の視点でみられる

総合大学 山形大学をモデル
キャッチフレーズ『地域に根ざし、世界を目指す』
教員が楽しめる大学でないと学生がついてこない。
自発的な授業
学生へのアンケート地域は田舎くさい
地域の発掘
世界の第一人者を育てる(地域への定着)

方略

3 実行計画

学生をどうする

HPの充実→アピール



更新の必要性あり。

単位をくれる先生は良い？ 教え方教師のモチベーション



ベストティーチャー賞 (若手と一般)

- ・教養教育
- ・自己申告 + α

専門部局をつくる←ボランティアベースではだめ。

(発表したことだけをつくる)

(事務作業の軽減)

自動的に宣伝へと持って行ける

現状年 1 回とかの更新頻度 (山形大)

普段からの準備 10 年~20 年先を考える

任期制：短期の成果に行きがち

大学としては、100 年、200 年先を考えている。

4 評価

アクセス数

マスメディアへの登場

認知度のアップ

学生, 教員, 地域, (親), 学会, 理事, 資格試験合格率, 入試

大学ランキング, (教員ランキング)

全体会記録

司会者 丸岡 泰
記録者 笠原 岳人

- ・ 個性的な大学づくりを目指して大学改革を行っていくにあたり、現状では教員も学生も個性が発揮されていない。→ボトムアップも必要か？
- ・ 様々な企画を行うにあたり、外部からの評価をどのように考えていくのか？
→親，地域住民，学会，行政など
- ・ 外部評価はこれからの大学運営には必要であるが…！
→様々な評価を受け止めた上で，どの様に評価者に返していくかのシステムの構築も重要
- ・ 授業評価の中に，教員が楽しんで気持ち良く進めることができたのか？を問う設問も必要！
- ・ ボトムアップかトップダウンか？
→理想の大学を目指すにはよいのか？ 結論出ず…。
皆さんで考えてみて下さい。宜しくお願いします。



プログラムⅢ 「科目設計：1 授業名と目標の設計」

◆ グループ作業記録

蔵王 班

司会者 古川 英明
記録者 服部 聡
発表者 櫻井 茂明

授業名：「社会的ニーズ論」

大学の個性を発揮する授業

- ・ (フィールドワーク)
- ・ 分散型キャンパスのメリットを活かす。→大学の個性を発揮
- ・ 教養教育を想定。

↓

各学部における研究（研究室）について，教員から学ぶ。

- ・ 学生自らのニーズ掘り下げる。→大学で何をしたいのかを発見させる。

他学部

- ・ 学生が訪問
- ・ 教員が訪問

→

→社会的なニーズにこたえる。

- ・ 一方通行の授業ではなく，双方向の授業
- ・ 社会的ニーズを探していく。（教員，学生いっしょに）

↓

ニーズの定義…？



ひだりうま 班

司会者 中房 敏朗
記録者 岩田 賢一
発表者 齋藤 学

授業名の決定と学習目標の設定

案 「山形学」, 「東北学」
学部 1 0 r 2 年対象 (1 年後期)

認知 ・ 地域に学生がとぶ
・ 実態を体験, 調べる考える。
・ 総合的学習の具現化
例: 左馬 (ひだりうま), 食育, うるし, 民族, はしを作る。

態度: グループ学習

技能・ 映画に残し Web で世界に発信 (英語で)
・ 大学横断的講義
大学対抗プレゼンテーション大会

おくのほそみち 班

司会者 生井 恒雄
記録者 丸岡 泰
発表者 永井 慎

国際性 国内 日本事情と外国事情の比較ができる。
政治経済

授業名: 「善良な地球人養成講座」

国際性 平和 豊かさ コミュニケーション
日本のこと 異文化理解

- ・ 自分たちで考える
- ・ グループ学習
- ・ 大学はサポート役

学習目標

- ① 基礎知識
- ② 学生が論理立てて説明できる。
 - ① 現実認識 — インターネット, 新聞
 - ② 文化, 風土, 宗教, 歴史
 - ③ 日本
 - ④ 自分がどうする。

芋煮会 班

司会者 佐藤 賢一
記録者 井上 純人
発表者 木俣 光正

“21世紀を生き残れるか”

20世紀をふり返って

授業名：「21世紀の問題“破壊”“危機”をKey Wordとして」

環境
戦争
健康
エネルギー
人間関係（いじめ）
コミュニティ

- ・ 学生がこれらをさしせまった状況であるという認識をもつ、観念ではなく現実に起こっている。



教育がそのために働きかける、きっかけを与える。
オムニバス形式での講義
色々な立場の人からの講義
現場を見る

方法論

・ 模擬授業 図書館の利用，webの利用→整理，解釈

・ ディベート形式

→最後に解決策にたどりつくかなくとも，学生が様々なことに気づくことは大きな成果だろう
問題があって，解決のステップを踏んでいくことは，社会人として必要な技量

→社会のニーズに応えることになる。

- ・ 学生が主体的に学ぶことを身につける。
- ・ 問題発見，調査能力，核心をとらえる能力を身につける
- ・ アカデミックなコミュニケーション能力を身につける

りんどう 班

司会者 三浦 光哉
記録者 田村 英樹
発表者 内丸 仁

- ・対象は 1 年生 ← 「社会意識と労働意欲を培う授業」
 - ・「職業」の具体的な事を伝えられるのは企業人
 - ・今でも、企業の方、OBの講演会はあるが、学生にとっては受動的
 - ・基本的に、社会やマネージャーの話 ← これまで、
→今はさらに、自分の所属する分野の話がほとんど

自分の専門分野と、他分野、いずれの話も聞く。

→専門における意識の向上と、他分野にまたがる共創性や違いに関する認識

実施方法案

6名の外部講師

- ・公務員
- ・専門職（現場）
- ・世界レベルの中小企業
- ・トラブル（倒産の危機等）を乗り越えた企業
- ・（何度か）転職を経験した人

選定においては、必ずしもトップである必要はなく、むしろ多様に

各1回の講演と合わせて、ある具体的な「問題」の提起をしてもらう。

この問題に関して、チームで解決方法を論じる

↓
様々な学科の学生から構成される

→ 授業名：「職業人生入門」

全体会記録

総司会者
記録者

A 班：授業名：

1. 社会的ニーズ論
2. ・分散キャンパスのメリットを活かす。
・各学部，各教員における研究について教員が学ぶ。
・学生自らのニーズを掘り下げる
・学生が訪問
・各分野の社会的ニーズを知る。
・一方通行の授業ではない。

B 班：授業名「山形学」～調べて伝える山形学～

- 目標・山形の文化，地理，経済について理解（認知）
- ・調べる，まとめる，話す（技能）
 - ・集団作業（態度）
- 英語への関心

モチベーションを上げるためコンソーシアムでやりたい。

C 班：授業名「善良な地球人の基礎」講座

目標 学生が地域の現状を認識し自分の貢献方法を考える。

目標の記述

- ①地球の現状講義 ——インターネット，新聞
- ②文化風土，歴史理解
- ③日の紹介，世界との比較
- ④各個人の役割認識

D 班：授業名「21世紀の諸問題に対応する授業」

「21世紀を生き残れるか」

目標 21世紀を振り返って→21Cの問題
破壊，危機

問題意識 学生がさしせまった状況であるという認識を持つ。（講義，現場を見る）

方法論 情報検索 —— 図書館，Web

目標 問題発見能力，ディベート能力，問題解決能力

E 班：1「職業人生入門」

2 学習目標

- ①専門的職業意識を明確に
- ②多様な職業観

3 到達目標

多様な職種をと立場からの企業活動における問題提示に対して複数の学科学生で構成されるチームで解決等を論じる。

プログラムⅣ 「科目設計2:授業内容の作成」

◆ グループ作業記録

蔵王 班

司会者 出川 真也
 記録者 長橋 雅人
 発表者 服部 聡

学習方法

(形態)

- ①研究室・教員訪問
- ②企業訪問
- ③フィールド調査

(対象)

- ・ 6学部, 1年生
 - ・ 10人/班×12班
- (チーム分け) (120人を想定)

(内容)

- ・ 対象分類 (5つ)
- ・ 理, 工, 農, 医, 人文・教育

(目標)

- ・ 他学部も含めて, 各専門の社会的ニーズを知る

(予算)

- ・ 20万/班×12班=240万円

- デジカメ
- 交通費
- 謝金

((15回))

1. オリエンテーション (講義)

2. 5分野の紹介

3. チーム分け

4. フィールドワーク (研究室, 企業, NPO)

→学生ニーズへのアピール

5. プレゼンテーション(報告)

・ パワーポイント使用

6.

・ 資料配付

7.

・ 5~7分/班の報告

⑧. 中間まとめ

社会的ニーズについて中間的まとめを行う

前半の反省・改善点の抽出

チーム変更 ディベート

後半へ向けて

9.

10.

11.

12.

13.

14.

⑮. 前期のまとめ

グループ討議

→学生によるニーズ

チェック表の作成 (ニーズの評価)

ニーズのレベルを5段階評価

ひだりうま 班

司会者 岩田 賢一
記録者 齊藤 美穂
発表者 中房 敏朗

学習方法

〈知る〉

東北ゆかりの人（ゲストスピーカー）
体験会（フィールドワーク）
山形の基礎知識

〈調べる・まとめる〉

グループワーク
5～6名+TA×6G
経験者

途中経過を
Web 上にて公開
互いに刺激し合う



〈伝える〉

発表会
学内
口頭発表

コンソーシアム（県内各大学）
Web



ふりかえり：総合評価・自己評価・次回への展望



山形学ライブラリー



おくのほそみち 班

司会者 永井 慎
記録者 富田 憲一
発表者 生井 恒雄

「授業内容の作成」

「善良な地球人の養成講座」

セミナー

教員からの課題提供

グループ分け← 5 名程度 × 5 程度

学生からの自主的な課題提供

- ・ 現状理解
- ・ 問題点の発展

学生による先生訪問

→ ・ 文化，風土，歴史，宗教の講義

環境と経済政治

→ 専門家 or 留学生

留学生による発表

-
- ・ 国内との比 [講義] 明治以降の近代化を中心に
 - ・ 自分の専門性毎に再グループ化
 - ・ プレゼンテーション

学生に地球問題に取り組む気持ちを持たせる

媒体：インターネット，新聞，図書館，教員訪問，留学生，外国人居住者

グ
ル
ー
プ

食糧	貧困
環境	健康
教育	戦争

芋煮会 班

司会者 笠原 岳人
記録者 板垣 哲夫
発表者 井上 純人

○対象学生

- ・学部横断
- ・教養1年次
- ・40～50人を最大限とする→グループに分ける
6班ぐらい

○90分×15回

- ・1回～5回 講義→グループに分ける（学生の関心に基づく）
- ・6回～10回 調査（グループごとに調査作業）
- ・11回～15回 ディスカッション

○講義

- ・20世紀の歩み（総論）
 - ・現状（各論）
 - ・人間関係
 - ・環境
 - ・国際関係，戦争
 - ・調査の具体的方法
- 学生の質問を誘導

○調査

- ・学生自身の関心，問題提起によるテーマに従って調査
Ex温暖化，タバコ，いじめ等々
- ・図書館の利用
- Webの利用
- 現場を見る

○ディスカッション（←調査内容に基づく）

- ・対立する意見をグループ分けする
対立点を浮き彫りにする
- ・問題点を発見する
- ・教員は交通整理をする

りんどう 班

司会者 武井 泰
記録者 森 礼子
発表者 三浦 光哉

科目名：『職業人生入門』

対象学生：山形大学の 1 年生で卒業したら山形県で働きたいと考えている学生 60 人
授業：

- 1 回目 オリエンテーション
- 2 回目 山形人気企業ベスト 10
- 3 回目 山形県内の公務員
- 4 回目 山形県内で働く専門職
- 5 回目 山形から発信する日本や世界的企業
- 6 回目 倒産からはい上がった山形魂
- 7 回目 山形で生き残る自営業
- 8 回目 山形に来てトラバークに成功（都会から山形に引っ越してきた人などの話）

以上の 7 回は下のような形式で行う。

1 回目

最初の 45 分間は外部講師の講義

残りの 45 分間は学生のグループ討議（各 6 名 1 グループ 計 10 グループ）

2 回目

最初の 50 分間は各グループの代表が 1 日目の討論結果を報告する（1 人 5 分、計 50 分）

残りの 40 分で外部講師の講評とアドバイス

学習方法：講義，グループ討論，発表，全体討論，1 日目と 2 日目の間に自習・調査

注意事項：・外部講師の男女比は可能な限り，同じとする。

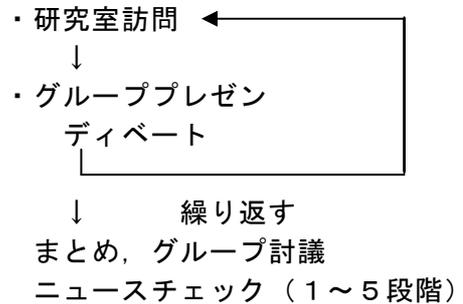
・謝礼は山形県内に優秀な学生を送り込むという目的を理解していただき，
気持ち程度とする。

全体会記録

総司会者 佐藤 賢一
 記録者 木俣 光正

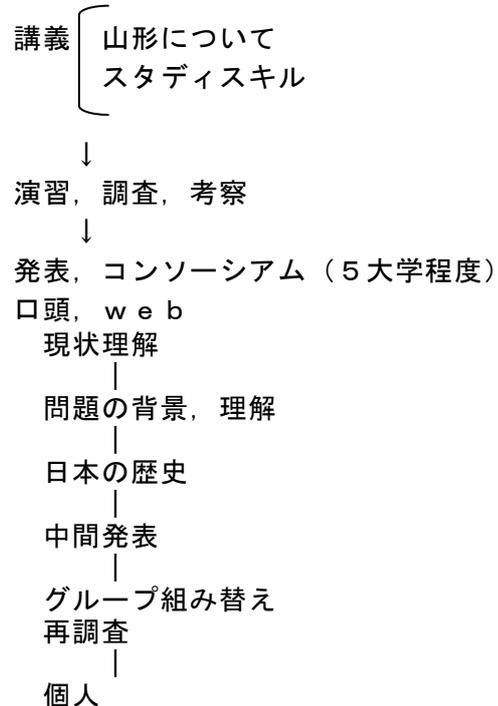
蔵王／「社会的ニーズ論」

- ・分散型キャンパス・それぞれのニーズを知る。
- ・1年生，10名／班，12班
- ・5分野（理，工，農，医，人文教育）
- ・20万／班 240万（デジカメ）



ひだりうま／「調べて伝える 山形学」

- ・6人／班，6班（TAをつける）
経験者
- ・生のものを聞く，体験する。
地域ゲストスピーカー，現場に行く

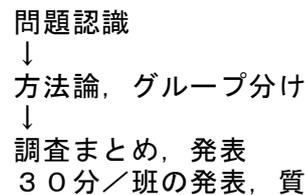


おくのほそみち／「善良な地球人の養成講座」

- ・ゼミナール形式 30名程度
- ・グループ形式
- ・留学生のTA

芋煮会／「21世紀を生き残れるか」

- ・1年生，40～50名程度
- ・身近なところから→世界規模への発展
- ・問題点を共有する
道徳的な方向に行かせない



りんどう／「職業人生入門」

- ・1年生 60人
- ・山形県内に就職希望
- ・自分の専門以外の話を聞く
- ・企業の話／グループ討議（40分／40分）
→発表10分／班 OHP

山形県内の企業，公務員，専門的職業
 世界に発信する企業
 倒産からはい上がった企業
 山形で生き残れる企業

プログラム V 「科目設計3:シラバスの完成」

◆ グループ作業記録

蔵王班

授業科目名『社会的ニーズ論 Social needs』（総合） 担当教員：各学部から 1 名 担当教員の所属：全学部 開講学年：1 年 開講学期：前期 単位数：2 開講形態：演習 開講対象：全学部 科目区分：			
【授業概要】 ・テーマ 各学部における各専門の社会的ニーズを知る。 ・ねらい 学生自ら、ニーズを掘り下げ、何をしたいのかを発見する。 ・目標 各学部における各専門・研究の社会的ニーズを知る。 ・キーワード 社会的ニーズ			
【授業計画】 ・授業の方法 ・日 程 ①～② オリエンテーション ③ 班分け ④～⑤ 研究室訪問→プレゼンテーション ⑥～⑦ (④～⑤と同じ) ⑧ 中間のまとめ ⑨～⑩ (④～⑤と同じ) ⑪～⑫ (④～⑤と同じ) ⑬～⑭ (④～⑤と同じ) ⑮ 総合評価、まとめ			
【学習の方法】 ・受講のあり方 フィールドワーク、プレゼン ・予習のあり方 あらかじめ、フィールドワークにて調査することを、まとめておく。 ・復習のあり方 中間総合評価にて			
【成績評価の方法】 ・成績評価基準 ・方法 (各プレゼン時) 学生の相互評価、各学部のコーディネーター教員による学生評価、 学生による各研究室ニーズに対する評価、レポートによる学生個人への評価			
【テキスト】 各研究室			
【参考書】			
【科目の位置付け】			
【その他】 ・学生へのメッセージ 主体的に ・履修に当たっての留意点 ・オフィスアワー ・担当教員の専門分野			

ひだりうま班

授業科目名『調べて伝える山形学』			
担当教員：			
担当教員の所属：1年			
開講学年：1年	開講学期：後期	単位数：2単位	開講形態：演習
開講対象：		科目区分：	
【授業概要】			
・テーマ	山形の文化・地理・経済などについての理解を演習を通じて深める		
・ねらい	山形についての調査・研究を通じて、大学における学びの基礎的手法を身につける。あわせて地域コンソーシアムを活用した相互発表、相互評価を経験する。		
・目標	〈認知〉山形の文化・地理・経済についてより多くの知識を獲得することができる 〈スタディ・スキル〉調べる・まとめる・話すの学習基礎技能を身につける 〈ヒューマン・スキル〉集団作業を通じて自分の役割を自覚し、与えられた役割を最後まで全うする		
・キーワード	山形 地域研究 コンソーシアム Webライブラリー		
【授業計画】			
・授業の方法	グループ学習＋TAのサポート活用 フィールドワーク ゲストスピーカーを招いた講義		
・日程	① オリエンテーション ②～⑥ 講義〔ゲストスピーカー〕 〔スタディスキル〕 ⑦～⑩ 演習〔調査〕 〔プレゼンテーション〕 ⑪, ⑫ 発表〔口頭〕 〔Webライブラリー〕 ⑬, ⑭ ふりかえり (相互評価, 自己評価, 将来への提案)		
【学習の方法】			
・受講のあり方			
・予習のあり方	7回目以降の演習にむけて、各グループごとに課題選定のための事前調査をすすめる。		
・復習のあり方			
【成績評価の方法】			
・成績評価基準	知識, 技能, 態度		
・方法	知識	中間ミニテスト	20%
	技能	※プレゼンテーション	20%
		Webページ	20%
	態度	出席＋取り組み	20%
		+最終レポート	20%
		(ふりかえり+将来へ提言)	
	※グループとしての評価		
【テキスト】			
【参考書】			
【科目の位置付け】			
【その他】			
・学生へのメッセージ			
・履修に当たったの留意点			
・オフィスアワー			
・担当教員の専門分野			

おくのほそみち班

授業科目名『善良な地球人の養成講座』			
担当教員：			
担当教員の所属：			
開講学年：1 年	開講学期：前期	単位数： 単位	開講形態：
開講対象：	科目区分：		
【授業概要】			
・ テーマ	・ 食料・教育・環境・健康・貧困・平和 これらについてグループごとに調査，発表		
・ ねらい	・ 国際間の問題を認識し解決するための能力の養成。 ・ 自国と他国の比較を理解		
・ 目標	①地球の現状認識 ②文化，風土，歴史理解 ③日本の紹介，世界との比較 ④各個人の役割を認識		
・ キーワード	・ 世界の問題への認識 ・ 自国と他国の理解 ・ 個人の役割の認識		
【授業計画】			
・ 授業の方法	テーマ別グループ化 グループ別に調査，経過発表 講義 発表（グループ），レポート作成（個人）		
・ 日 程	1. ガイダンス（グループ分け） 2. 3 現状理解 インターネット，新聞，ビデオ 4. 5 問題の背景の理解（歴史，文化，経済 etc） 6. 7 日本の歴史・文化（専門分野の教員を訪問） 8. 9 中間発表（パワーポイント使用） 10. グループ替え（専門性を考慮した現実的項目へ） 11. 12 再調査・経過報告（パワーポイント使用） 13. 14 グループ報告会・討論（パワーポイント使用） 15. 評価（個人レポート）		
【学習の方法】			
・ 受講のあり方	受講者が地球上の問題を背景まで理解できるよう，積極的に発言，意見交換する。		
・ 予習のあり方	インターネット（検索エンジン），図書館（新聞），専門教員の訪問，グループ討論		
・ 復習のあり方	最終レポート作成のため討論のメモを作成しておく		
【成績評価の方法】			
・ 成績評価基	・ 問題への理解度 ・ 個人の役割の認識に至っているか。		
・ 方法	・ グループごとの投票（60%－70%） ・ 教員のレポート評価（30%－40%）		
【テキスト】	なし		
【参考書】	『現代用語の基礎知識』『imidas』『wikipedia』		
【科目の位置付け】			
導入，国際性の醸成			
【その他】			
・ 学生へのメッセージ 国際化はすでに日常の一部である			
・ 履修に当たった留意点 調査・議論への積極的参加			
・ オフィスアワー			
・ 担当教員の専門分野			

芋煮会班

授業科目名『21世紀を生き残れるか』 担当教員： ××× 担当教員の所属： 学内 開講学年： 1年 開講学期： 前期 単位数： 2単位 開講形態： 講義・演習 開講対象： 全学部 科目区分： ×××			
【授業概要】 ・テーマ 20世紀をふり返って21世紀を生きる ・ねらい 21世紀の問題としての、環境、戦争、健康、エネルギー、人間関係、コミュニティの破壊の状況を認識させ、さらに、その解決策を探る。 ・目標 問題発見能力、アカデミックコミュニケーション能力、問題解決能力を培う。 ・キーワード 破壊、危機、21世紀			
【授業計画】 ・授業の方法 講義…問題提起、破壊の具体例 学生による実習…方法論、図書館、Webの使い方 グループ分け、学生自身による調査 演習…調査の発表、ディベートなど ・日 程 1～5 講義 6～10 学生による実習 11～15 演習			
【学習の方法】 ・受講のあり方 21世紀の破壊の具体的事実を調査し、発表し、討論する。 ・予習のあり方 あらかじめ配付された講義資料をよく読むこと ・復習のあり方 既になされた講義、実習、演習の内容を要約し次回の授業に臨むこと。			
【成績評価の方法】 ・成績評価基準 調査方法の習得、コミュニケーション能力、問題解決能力 ・方法 ・論文（レポート） ・授業時における、教員の観察による評価			
【テキスト】 配付資料			
【参考書】 適宜指示する			
【科目の位置付け】 学部横断的な中核科目			
【その他】 ・学生へのメッセージ ・履修に当たっての留意点 ・オフィスアワー ・担当教員の専門分野			

全体会記録

総司会者 森 礼子
記録者 三浦 光哉

シラバスの内容については 別紙参照のこと。

全体質疑

①蔵王班

(Q) 予習は、ビデオやプレゼン等、学生に負担ではないか？

(A) 学生には、かなり負担になるかもしれない。

②ひだりうま班

(Q) TA に対する教員の指導はどうするのか？

(A) 授業外で教員と TA の話し合いをしなければならない。

③おくのほそみち班

(Q) グループ活動の中で、活躍できない、意見できない学生はどのようにフォローしていくのか

(A) 30%~40%は、個人評価する。当初の授業で説明する。

④芋煮会班

特に質問なし

⑤りんどう班

(Q) インターンシップ等では、企業が大学にこないのでは、協力が得られるか？

(A) PR をかねているし、インターンシップよりは、大丈夫なのでは。

司会から

発表内容は現実的に実現可能か？

